

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果(広報用)

プログラム名	海外の森林・林業とフォレスター研修・研究プログラム	
学部・研究科名	農学部・総合理工学系研究科	
プログラム実施期間	2018年9月14日 ~ 9月26日	
研修先(国・都市・施設名)	ドイツ・ロッテンブルク・シュツットガルト	
参加者数	6名	知の森からの支援者 : 3名
プログラム概要	環境共生社会の先進事例であるドイツで行われている施策や森林管理の実態がどのような状況かを、国内で紹介されている情報だけでなく、歴史的経緯や文化的背景も含んだ実感的な感覚で理解することが重要である。そこで、ドイツ南部に位置するロッテンブルク林業大学で、研究者だけではなくフォレスター(森林官)や作業員、公園管理者、行政担当者等、実際の技術者からもレクチャーを受けることで、理論と実践を包括的に学ぶ機会を与える。その中で、国内の状況と比較し、導入すべき事例や国内のほうが優れている事例を実感的な感覚を持って理解し、研究や技術の進展だけでなく、グローバルマインドを持って地域で活躍するための知見を身に付けることを目指す。	

実施状況・成果

ロッテンブルク林業大学と日本の8大学等共同の日独サマープログラムとして実施された。ドイツ林業は、都市の発達とともに森林の利用が進み、人工的な攪乱を多く受けながらも、試行錯誤を繰り返しながら、安定した林業経営体制が構築されている。このような林業が可能である、ドイツを含む中部ヨーロッパの気候、地質、植生の状況について、実習を交えながら、体系的に学ぶことや、森林の多面的利用に関して、レクリエーション施設の実情、利用者や地域住民との関係性など、実際の管理者からレクチャーを受け、社会的背景を含む全体像を理解することを目的としたプログラムである。なお、講義は全て英語で行われた。

ドイツの持続的林業は、人為的な造林と天然力を活かした造林のバランスの中で行われており、日本に比べ低い多様性や、降雨量の少なさ、古い地層からなる環境下で、成立してきたものであることが体系的に学ぶことができた。また、枝打ちなど国内でも実施する作業の中での違いや、生産システムの比較も体験することができた。木材生産現場だけでなく、製材、住宅向け加工等、木材利用の現場との関連も見学し、利用目的に合わせた、造林体系が確立していることが理解できた。

本プログラムを通じて、利用先も見据えた明確な経営方針、堅実なデータの蓄積、柔軟なステークホルダーからの要望への対応など、ドイツ林業の特性が把握できた。これまで森林経営の失敗に学ぶところも大きいと説明を受けた。歴史に学ぶことに加え、専門教育だけでなく啓発活動にも積極的であり、ドイツ林業の持続的発展性の確立に人材育成が大きく寄与していることが伺えた。

学生の声①-農学部 学生

ロッテンブルク林業大学は世界的な林業先進地域であるバーデン＝ヴュルテンベルク州にある大学です。林業経営者であるフォレスターの育成を目的とし、学生は林業技術や環境保全、森林経営など総合的に学んでいます。演習林として2500haほどの広大な土地があり、研修中にも立ち入りしました。大学内には狩猟用の高台小屋や解体所などもありました。学生は屋外で語り合っていたり、教授は犬を連れて歩き回っていたり、どこか信州大学農学部をイメージさせるような穏やかな雰囲気を感じました。

学生の声②-総合理工学研究科 学生

国内でも主要な産業としての地位を確立しているドイツ。そんな国で行われている林業はどれほどのものなのか。日本の林業との違いは何か。日本の林業に何が還元できそうか。そんなことを考えながら参加しました。実習では、木を育て伐り出す現場・機械、伐りだされる木材の大きさ・値段のような”林業”そのものの見学だけでなく、裸足で歩く自然公園や青少年向け教育施設など、ドイツの風土や人々に自然や森林が強く根付いている”環境先進国たる所以”を体感しました。

ロッテンブルク林業大学での講義



枝打ち時の事故対応の方法

